熊本大学学術リポジトリ

台湾・台南県農村部を中心とした廟の「集い機能」に関する事例的検討

著者	鳥飼 香代子, 蕭 玉燕
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 自然科学
巻	50
ページ	89-101
発行年	2001-12-14
その他の言語のタイトル	A Case Study of Temples that open for Residents to be in Communication in Village in Tainan Prefecture
URL	http://hdl.handle.net/2298/2410

熊本大学教育学部紀要，自然科学
第50号，89－101，2001

台湾・台南県農村部を中心とした廟の「集い機能」に関する事例的検討

鳥飼香代子・蕭　玉燕*

A Case Study of Temples that open for Residents to be in Communication in Village in Tainan Prefecture

Kayoko TORIKAI and Yuyen HSIAO

(Received September 4, 2001)

There are many temples in Tainan, where people gather everyday to pray and enjoy themselves. The purpose of this paper is to show some social functions performed by the Taoism in the local society of Tainan. The field research in August, 2001 reveals main four types of social function as follows.

1. The center of social gathering (type1). People spend communal time with their fellow villagers.
2. The center of social education (type2). In some temples there are small school in which villagers enjoy the anti-illiteracy programme and other social educations.
3. The center of shopping and entertainment (type3). In some temples people enjoy shopping and drinking-eating in the stalls in the place.
4. The center of shelter (type4). In some temples, mainly large ones, they have an accommodation facilities for pilgrims to stay at night. This facility gives a chance for local people to have an income.

Temples are the centers of life in the village.

Key words : Taoism-Temple, Communication, Social Education, Center of Life

1. はじめに

日本では地域に居場所がなくなったと指摘されるようになって久しい．地域の居場所として台湾・台南県の農村部を中心に，住民が活用している廟施設の利用をみることで，地域施設での集いの特徴を把握し，もって集い施設の計画提案へと結び付けたい．

台湾は17世紀のオランダの占拠以降，明末鄭氏の割拠，200余年にわたる清朝の統治，50年間の日本植民地という，政治的に極めて不安な局面を経てきた．漢人の大規模な移民は鄭氏時代に始まり，清朝末期まで，断続して行われ，対岸の福建と広東の2省からが最も多い，移民が故郷からもたらした宗教の主流は道教であるが，周辺社会の民間信仰や雑多な俗信と混合し，台湾独自の発展を遂げた．多くの廟は個人的信仰から始まり，次第に地域住民（多くは村）の中に浸透していく．そしてその過程で多様な神を導入してきた．つまり廟は拡大していく傾向が強く，これを反映して，廟の施設や建築物も拡大していくという特徴をもつ．

廟に関しては台湾，日本国内ともに多くの研究がある[1]が，集いの機能に注目したものは高橋らの論文に限られ[2]，しかも台北市の中心地区にある1事例を対象にしたものである．本稿で

* 熊本大学自然科学研究科博士後期課程

は農村部の廟を対象に，集い機能を把握しようとしたものである．農村部の廟は村民が共同で祭り，維持管理しながら，村のイベントや会議に使う村民施設の役割も果たしていると考えられる．そこで調査はこのような村廟の役割に注目するが，近年新聞などで廟の新しい活動や取り組みが取り上げられることが多く，新しい廟の役割が模索されている．そこで，地域で積極的な活動をしている廟を対象として選択する．

2．廟の集い機能の事例別検討

調査対象とした廟13事例の中の10事例は台南県にある．調査対象廟の選び方は，地域の中で活発に活動する，あるいは特徴のある廟である．台南県の廟数は954軒である（台南県の人口は約110万5千人，面積は約2016m²），3事例は台南市でありここの廟数は257軒である（台南市の人口は約72万8千，面積は約175m²）．なお台南県及び市は台湾で最初に開拓された地域の一

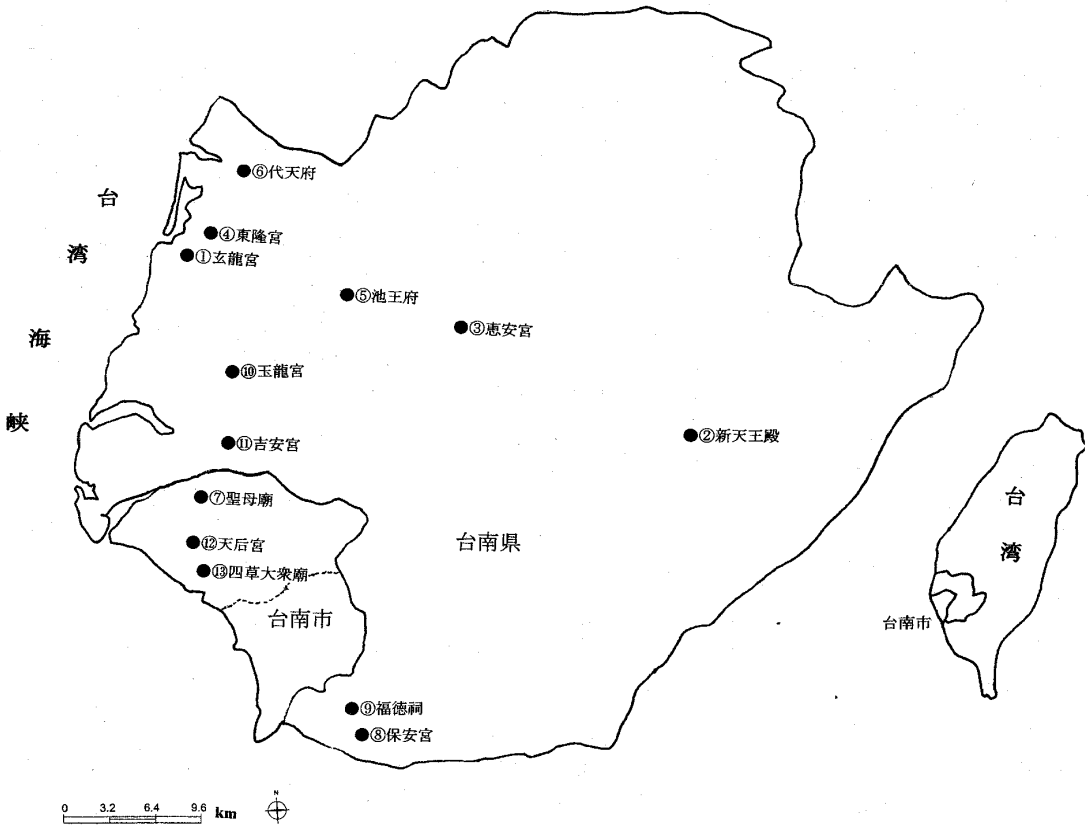


図1　13事例の分布図

つであるため，台湾における廟の発祥の地でもある（図1）．

廟利用の調査は2000年8月上旬であり，2001年1月に補足調査を行った．調査内容は，廟の歴史と管理人のプロフィール，使い方と管理の仕方であり，方法としては，廟建築の写真撮影，管理人へのヒヤリングである．まとめは管理人の話した内容をなるべく原型に近い形で記述した．

事例 1　台南県北門郷蘆洲溝村 ── 廟名「玄龍宮」(図 2)

この村は世帯の半数以上が「邱」という同一苗字をもつ同族的な漁村で，漁か牡蠣の養殖をしている.180 年前に村と家族の安泰を祈るため，先祖は 3 つの神像を中国人から入手した．その後これらの神像は，交代で信者の家で祭られていた．5 年前の神の啓示により（村のシャーマンのお告げ）共同出資で廟を完成させた（2000 年 7 月）．廟の立地は，風水とシャーマンで決めた．約 300m^2 の廟建築[3] と，劇台[3] そして敷地は約 1000m^2 である.5 年の歳月をかけて，約 3 千万元（約 1 億円）の寄付金を使った．廟の管理は「炉主」[4] が奉仕でやっている．管理組織は管理委員会であり，主任と副主任が 1 名ずつ，委員 12 名，総幹事，総務，経理も 1 名ずつであり，全員奉仕である．毎朝廟に拝みに来ている人は「廟ができて，先祖の面子が立つ」と感想を述べたそうである．

午前中，村民は海に出て，午後 2 時ごろ仕事が終わると廟に来る．お茶を飲む，あるいは碁を打つ．劇台の下には，カラオケ設備もあり（14 時から 21 時まで使用可能）交流を前提として建設されたといえる．交通の不便な村にとって，廟ができたことは村内での集いに画期的な影響を与えると言える．管理人は 60 代で，牡蠣の養殖をしていたが現在はもう仕事をしていない．したがって毎日廟に来て集いに参加している．

廟は地域の人たちが交代で守っており，費用，管理運営すべて自主的な組織で行われている典型的な村廟であり，村民の集い施設（むしろ日々の溜まり場）として毎日使われていることが分かる．更に村民が全世帯に呼びかけ企画したカラオケや演劇などの娯楽（企画集い）にも使われる．

事例 2　台南県玉井郷 ──「新天王殿」(図 3)

本廟はマンゴで有名な玉井郷の町から車で 10 分ぐらい離れた農村の中心地にある.60 代の管理人は廟に住んでいる．仕事の内容は朝晩の神への線香，門の開閉，掃除などである．もう一人の 30 代の女性は事務担当であり，家は近くのため仕事をしながら子供の面倒も見ている．事例 1 の村廟より規模も組織運営も大規模である．

廟の土地は約 21000m^2 あり，主神は 1677 年頃から信者の家で祭っていたが，1889 年に村民の黄氏が土地を寄付して日干し煉瓦（土角厝）の小屋がけの廟を造った．1915 年頃戦争で崩壊したが，50 年後の 1966 年に新たに建て直した．参詣者が多くなるにつれて狭いといわれ，1987 年に再度建て直しはじめ，1990 年に今の形ができた．主神のほかに 6 人の神を合祀している．創建に至る経緯は典型的村廟である．

廟庭の左側に二階建ての集会所がある．一階は壁無しの開放空間で，二階は廟の会議室と文物室として利用されている．毎月旧暦の 2 日，16 日に地域外の信者が観光バスで来て，シャーマンの講義を受ける．シャーマンは 60 代の男性で，20 代の時神に選ばれたそうである．彼は神のお告げを記録し，それを年に 1 冊の本にして（今年でもう 6 冊目）無料配布をしている．シャーマンのもう一つの役割は病気の診察である．無料のため，信者たちは診察のあと廟に寄付をする．診察が多く，廟の重要な収入源となっている．このシャーマンのため，廟は村廟の位置から地域外の人まで対象とした信仰観光地化しているといえる．毎年の旧暦 10 月 17 日から 21 日までは神の誕生日を祝う期間である．村の全世帯の他に地域外からもたくさんの信者が参詣に来る．この期間村民は仕事を休んで廟の手伝いや信者に配る祝い蕎麦を作る．

次のような廟の現代的な活用法がある，約 50 世帯のこの村はかつてグアバ，スターフルーツなどの果物を栽培する寒村であったが，若者たちは 5000 ～ 6000 万元を集め，花の栽培に成功した．最初，村の長老達は花の栽培に反対していたが，「最後に長老たちを説得したのは神様だ」

と栽培組長兼識字班先生がいったように，廟のお告げをうまく利用して問題解決を図った．つまり村が廟で識字班という塾を組織したとき，廟が出版した託宣の言葉を借りて，長老達の考え方を切り替えたのである．なおこの識字班は今でも続いている，毎晩8時から10時まで,20～30人が勉強に来ている．日曜，祝日だけが休みのため，平日の夜の廟は賑やかである．大人の塾を組織するほかに，村の小学生と中学生にも奨学金を提供しているそうである．また村はいつも掃除が行き届いているが，廟から放送で呼びかけると総出で参加するからである．1999年の921大地震のとき，廟も村民に寄付を呼びかけると，収入の少ない高齢者達でさえ寄付金の合計は200～300万元に達した．

本廟は高齢者や子供を対象とした教育活動に熱心な村廟であると同時に地域外の人をも巻き込んだ信仰活動を展開している廟といえる．更に廟を利用した啓蒙活動なども行われており，リーダーが積極的な村落経営の一環として廟を活用しているといえる．溜まり場的な利用はみられないが，目的をもった計画的，啓蒙的利用が日常的に行われている．更に地域の観光地として村に現金収入をもたらしている，地域の拠り所であると同時に，現代的な廟経営のなされている廟といえる．

事例3 台南県官田郷西庄村 ――「恵安宮」(写真)

この廟は2000年に台湾で一番人気のある廟だといえる．なぜなら，台湾総統陳水扁の故郷の廟だからである．選挙結果の発表から就任儀式までの2ヶ月間で約200万人が訪れた．毎日平均50台の観光バスが来ていたそうである．村人は廟や陳総統の実家への来客をもてなすために，おめでたいと考えられている団子スープとビーフンスープを毎日作った．費用は500～600万元かかったが，全部村人の寄付である．お祝いの期間村の人々も熱心に来客を応対した． 経理は40代の女性で，10年近くこの廟で仕事をしてきた．管理人は60代で，廟に住んでいる．二人とも管理委員会が雇っている．約70坪の，あまり大きくない「恵安宮」は東庄村と西庄村の合わせて600世帯のいわば「宗教信仰センター」である．西庄村の村民は稲と菱の実の栽培で生活している．昔は貧乏な村であったが，今は菱の実で繁盛している．

300年前陳氏の先祖は福建省の漳州から「媽祖」を奉迎して，鄭成功の軍隊と一緒に台湾に来た．移民した当時皆貧乏で廟を建てる力がなく，交代で「炉主」の家で祭ってきた．1931年に村長の提案で廟を建てはじめ，1933年に完成し，「恵安宮」と名付けた．1993年に管理委員会は廟を建て直すことを提案し，約4700万元をかけて,1997年に完成した．当時台北市長であった陳総統も出身地の優秀な代表として，この廟の顧問になっている．管理委員会のメンバーは当時の陳氏の選挙に力を入れていたため，現在廟の隣にある選挙本部は陳総統のサービスセンターになっている．近所から総統がでたのは村民にとって，非常に名誉なことで，やはり廟のお陰だと村民達は信じている．

創建への経緯は村廟であるが，台北市長が出現してから2村の廟へと拡大した．そして総統出現により，観光地となった廟である．そのため連日村民を巻き込んだ観光地騒ぎになっており，さらに対象村民世帯数が多いため，村民の溜まり場の機能はなくなっている．しかし総統騒ぎが沈静化したとき，廟がどのような使われ方に落ち着くかは未定である．

事例4 台南県北門郷三寮湾 ――「東隆宮」(写真)

三寮湾は台南県の西南海岸にあり，約500世帯の集落である．1665年鄭成功とともにやって来た先祖は，渡航の無事を祈るために神を同行してきた．1902年に廟を建てたが，他の神も祭るため1948年から1970年の間にさらに2，3回建て直しをした．現在の廟は8年間かけて建て直し1978年に完成したものである．この新しい「東隆宮」は、廟の建築意匠の集大成だと言われて

いる．設計や彫刻，彩色絵などは当時の高名な師匠の作品である．管理組織はいわゆる「董事会」で，董事（取締役のこと）と監事を合わせて40名位いる．董事長は建築業者で（75歳），この担当を30年している．

東隆宮は教育にも力を入れてきた．例えば1966年に奨学金委員会を創立し，隣接する小学校の建築や活動に絶えずお金を出してきた．また1993年に廟で識字班を組織し（受講者は年に約30人），1995年に「台湾民間信仰研究委員会」を成立させるなど多様な教育活動を展開している．

三寮湾の住民は牡蠣か魚の養殖以外働く所がないので，大半が高校を卒業してから都市へ出稼ぎに行く．経済的に成功した人は，故郷に恩返しをする．董事長は幼少時に貧乏で教育を受けられなかったため，地域外で成功した信者達と共同して故郷の文化レベルを向上させるために，「東隆宮文化センター」の建設を決めた．2000年5月に，まず3階にある「王爺信仰文物館」をオープンした．文化センターは地上7階地下1階の建物である．650m^{2}ある文物館の展示内容は神と故郷の紹介である．5月のオープン以来の客はほとんどが小学生と高齢者である．8階建ての文化センターは「王爺文物館」だけでは来客に魅力がないと考え，現在他のテーマ館も設立中である．1階の展示ホールは油絵と書道作品の展示会（場所代は無料で，掃除代のみ随意払い），6階の工芸館は小学校の先生対象の提灯教室が企画された．

文化センターは管理委員会（15人）で管理，受け付けと掃除員各1人である．説明員が必要なときは，県文化局から支援が来る．

創建の経緯は村廟であるが，リーダーの個性を反映して，文化レベル向上のための施設・設備を整える活動が前面に出た廟である．しかし，活動が施設・設備作りに集中化した結果，多様な集い機能が消失してきた廟とも言える．

事例5　台南県麻豆鎮 ──「海埔池王府」（写真）

麻豆鎮の200年前は，海と港であったがその後海砂が積もって内陸の町になった．砂糖黍，稲，里芋，文旦柚などの豊富な農産物がある．池王府の所在地「海埔」は，昔，神の奇跡が現れたことがある場所といわれた．神は最初民家で祭っていたが，1984年神の指示によって立地を決め，300世帯の信者達の力で，1988年に廟が創建された．管理委員会運営で，参詣客の宿泊ホールも廟の両側に設置されている．

海埔里の里長兼廟の主任委員は，宗教が文化と集落の住民とを結び付けることを期待しているそうである．そして1996年に県文化局と協力して，「麻豆海埔社区宗教文化祭」を主催した．活動内容は宗教的福を祈る儀式のほかに，全国撮影コンテスト，学生のスケッチコンテスト，書道展示，懐かしい写真展示，蘭の花の鑑賞，昔の器の展示，お母さん達のフォークダンスや太極拳ショー，台湾歌謡，謎当て大会，台湾風オーケストラ演奏会，故郷の味試食などの住民が参加し楽しむ企画である．大会期間信者達は皆ボランティアとして手伝いに出てきた．自分の故郷についてもっと理解したいとの願いと，来客にも故郷を自慢したかったそうである．現在も廟の2階に学生の作文と，故郷の写真を展示している．最近，廟は「露天軍史博物館」を開設した．廟の事務員によると，教育熱心な委員が使えない武器を国が県や市にただで提供してくれることを知り，すぐ廟の庭に陳列しようと考えたそうである．廟の近くに小，中学校と幼稚園が何校もあるし，廟庭も広い（約39000m^2）ためである．夕方の廟庭では，2台の戦車に登ったり，バスケットボールやスケートをしたりしている子供たちの姿が見られる．

創建の経緯は村廟であるが，文化活動に力を入れた廟の管理運営をしている．溜まり場的な利用は，子供の博物館設置を中心として一定存在するといえる．

事例6　台南県北門郷 ──「南鯤魚身」　代天府（写真）

ここの神は1662年に中国から台南県北門郷の「南鯤魚身」に漂流してきた．今の廟は1928年にでき，国の二級古跡と認められている．信者が多い名廟なので，1969年政府によって「台湾省宗教記念観光区」と定められた．管理委員会運営で，対象は全台湾である．18万m²近くの廟地と中国風の庭園，回廊は現在では有名な観光地になっている．「王爺廟」[6] の本山だと言われており，台湾全土では分霊廟が7000軒もあり，毎年参詣に来る客が400万人を超えるそうである．参詣客のために，隣に「康榔山荘」という四合院の宿泊施設ができている．建築費1億元で72の部屋をもち，大きい会議ホールとレストランが付いている．今日では安くて人気のある旅館になったといえる．

観光客が増えてきたこの廟は近年6億元の予算で，廟の右側に「大鯤園」という中国風の庭園を造る予定である．将来は庭園にある建築物か劇台を利用して，民族ショーか舞台劇をおこなう予定もある．また廟の後ろに，「凌霄宝殿」（高く聳えている立派な廟建築の通称）という新しい建物も建築中である．2000年8月に主催した「22回全国文芸大会」は，この「康榔山荘」で行われた．文学講座のほかに，文学交流会，創作コンテスト，民俗曲芸などの内容であった．初日には陳総統も来た．文学大会のほかに，廟の右側にある「芸術ホール」でも，定期的に芸術作品展示会が行われている．約300m²のスペースでは有名な芸術家の個人展示会がよく開催された．

創建当初から，有名廟で村廟の面はほとんど見られず，むしろ宗教地であると同時に文化的観光地として発展してきたと言える．したがって，村民に宿泊施設の収入や雇用など観光地としての利益をもたらしている．溜まり場的な利用はみられず，観光地機能とあまり矛盾しない地域の文化センターの役割で地域住民に寄与している．

事例7　台南市――「鹿耳門聖母廟」（写真）

この辺りは近年台南市に合併された地域であり，農村部である．鄭成功以来の廟であるが，現在の廟は1976年から6年間かけて，紫禁城（北京）をモデルに新建された廟である．150000m²は東南アジア最大であり，観光ポイントとなっている．村廟の上の規模である境廟であり，対象世帯数は安南区全体（約4万世帯），祭っている神は100を超えている．参詣客のために宿泊所もある．廟の両側にある古典風の参詣客ホールは，現代的な設備と約150の部屋をもつ．民芸品売り場のほかに，文物展示場とレストランもある．観光地であるが同時に日常的に近所の高齢者が「涼亭」で碁を打つなどしながら，夕涼みや世間話をしている．祭りや祝日の駐車場は，観光バスと車で満杯である．安南区全域を対象にしており，世帯数では4万世帯ときわめて大規模である．この廟も歴史や文学講座を主催した．5月の中旬の「国際家庭日」に合わせて，廟側は台南市出身の国会議員と一緒に「台南家庭日」を企画した．広い廟庭で，500世帯が「懐かしい子供時代の玩具」，ゲーム・カラオケなどの活動に参加した．家族の記念写真撮影サービスのほかに，臨時の屋台もたくさんあった．廟の右側に新しい遊園地がある．遊園地の経営は廟側ではないが，土地は廟に借りたものである．これも廟の収入になる．遊園地に来た若者達が廟にもくることを狙ったものである．有名な史跡の廟を活用し，遊園地と抱き合わせた廟の収入は高く，廟の一つのあり方を示唆しているといえる．

元来は村廟であるが，今日では積極的に観光地形成をし，更に地域住民のための文化活動を企画しているきわめて活動的な廟である．また観光地であるにもかかわらず，溜まり場的な利用もみられることが大きな特徴である．

事例8　台南県仁徳郷「保安宮」（図4）

台南市南区の台南空港から車で約15分の距離にある．主神は1584年にはすでに民家で祭られていた．第二次大戦時，神様の霊験により全世帯が守られたと考えた200強世帯の信者は，約5

千万元の寄付金を出して1986年から10年間をかけて，現在の廟に建て直した．もともと「社区活動センター」がこの場所にあったため，廟委員会は200万元を使い，廟の斜め前に新しい「活動センター」も造った．廟と「活動センター」の間にあるのは市場である．市場は廟が経営している．

2階建ての廟は建築面積約144m^{2}であり，庭の向こうに劇台もある．屋根付涼亭がないが，5，6人の高齢者が廟の中でお茶を飲みながら世間話をしていた．そして管理人は側で食事をしていた．斜めにある露天市場は広くないが，多様な食料品や洋服類もあるし，近くには飲食店が何軒も軒を連ねている．即ち廟とその周辺は村住民の生活の中心地域である．

村廟でありながら地の利を利用して，市場経営などの経済活動を展開している廟である．そしてその結果，溜まり場であると同時に地域の中心地形成にも成功した例といえる．

事例9　台南県仁徳郷「福徳祠」（写真）

この廟は村に入る一般道の側にある．かつては約100m北側にあったが，道路拡幅工事のため，現在地に移ってきた．土地は鉄工場社長の個人所有であったが，寄付をした．排水溝傍のため，廟庭に当たる空間はちょうど溝である．役所の費用で，溝の上に庭に使えるような鉄の平台を造った．新しい廟を建て直すきっかけは，2000年の村長提案であった．事例8と同一地区である．

祭っている神はランクが低いと言われているが，「社区長寿会」のメンバー達（町内会の老人サークル）は毎晩7～10時まで廟庭を利用して，カラオケ大会を行っている．廟の前は空き地，隣は養殖池なので，近隣の迷惑にならないためである．管理委員会はあるが，管理人がいないため，廟の後ろの養鶏場オーナ夫婦がボランティアとして管理している．涼亭に椅子と机が並んでいる．先に「事例8」で会った2人の高齢者はここに寄っていた．彼らの話によると，午前中は「事例8」へ行き，帰りはこの廟に寄るそうである．皆に会って話をするのが楽しみだそうである．

創建以来，村廟よりもランクの低い廟である．廟建築はミニサイズ（16.5m^2）であるが，約90m^{2}の廟庭があり，トイレ，屋根付涼亭，物置小屋も整っている．廟といいつつも，住民の溜まり場として造られたといえる．

事例10　台南県七股郷「玉龍宮」（図5）

七股郷は台南県の西南にある．海に近いので，住民は漁業や養殖，塩干しや塩田の耕作などをしている．特に塩田の開発はすでに明の鄭氏時代からの歴史がある．この地区は安南区のハイテクフェアパークから近いので，新しい国際空港計画もある．廟は七股郷の東側の県道と，国道の交差する所にあり，真正面は海鮮の飲食店，後ろは「社区活動センター」，左側が道路と砂糖黍畑である．廟庭の向かいにはバスケットのミニコートも設置されている．約130年前民家で祭っていた神を，1949年に村長曾氏が村民と一緒に408坪の土地を寄付して，廟を創立し，1976年に建て直した．管理委員会運営で村民は約200世帯である．

廟の前に10人位の高齢者が，2グループに分かれて将棋やトランプをしている．そのすぐ側に移動の飲食屋台がやって来て，子連れの母親が子供に食事をさせている．そして庭の一隅には日常用品の屋台と「檳榔」屋さんが並んでいる．廟建築の全体は348m^{2}で，両側の付属居室はそれぞれ96m^{2}ある．左側の居室は公立の付属幼稚園として使われている．そして右側は事務室と会議室である．

廟は地域の中心地区を形成し，かつ中心施設でもある．そして地域の溜まり場でもある．創建に至る経緯や現在の使われ方も典型的な村廟である．

事例11　台南県 —— 七股郷永吉村「吉安宮」（写真）

台南県と市の境界の「曾文渓」の河口の近くにある．村民は約200世帯で，管理委員会運営で，1人の管理人を雇っている．1970年に信者荘氏からの土地の寄付があり，廟を創立した．1990年に道路拡幅工事のため現地に移転し，1995年に新しい廟を完成させた．廟の石彫刻は，廟の故郷といわれる福建省泉州のものである．廟建築は約600m²で，庭は2000m²ある．隣は「社区活動センター」で，廟との間にはバスケットコートがあり，近所の子供の遊び場になっている．廟庭の向こうはほとんど空き地である．この「活動センター」では，週に3回母親フォークダンスとカラオケサークルが行われている．母親たちはサークルの前や終わった後，廟に寄って参拝やおしゃべりをしている．

活動センターと共存している村廟であり，地域の溜まり場になっている．

事例12 台南市安南区 ──「鹿耳門天后宮」（媽祖廟）（写真）

1661年鄭成功が最初に台湾に上陸した場所は「鹿耳門」だと言われている．その後鄭氏は上陸が成功したことを神の御蔭だと思い，旧廟を造ったそうである．1871年洪水で旧廟が倒壊し，それ以降神様は2軒の民家で祭られてきた．そして1947年に別々に廟が建てられた，一箇所は事例7の廟であるが，もう一箇所はこの廟である．2軒の廟は現在も媽祖廟の本山だと主張して譲らないが，2軒とも規模が大きい．信者は台南市，県全域に分布している．

200世帯強のこの村では，この廟は信仰中心だけではなく，文化センターともいえる（約3000m²の敷地）．1992年から毎年文化祭（文化研修の合宿や親子成長キャンプなど）を実施，さらに民俗活動の書籍，テープ，ビデオなどの出版にも力を入れている．この文化祭は4ヶ月も続く．また1993年に文化基金会を設立し，村唯一の小学校に邦楽のオーケストラ団体を組織した．更に新しい廟文化を作り出すために，大学生を中心にボランティアチームも組んでいる．

多様なイベント開催による宿泊施設不足のため，昨年から新しい宿泊ホール（昔の屋敷の再現）を建て始めた．約300の部屋数で，宿泊料は自由料金という設定である．村人達が協力して経営している村自慢の廟だと言える．もちろん廟に収入をもたらすだけでなく，村民の雇用や村の収入にもつながっている．

創建の経緯は村廟であるが，文化活動と観光に力を入れており，本家争いの影響も考えられるが，対外的なアピールを主眼に置いた活動が目立つ．村民共同経営の宿泊施設をもち，村民の収入にも貢献している．溜まり場としても使われている．

事例13 台南市安南区 ──「四草大衆廟」（写真）

1700年王之麟は清政府の指示によって，明の鄭成功時代に戦死した戦士を祭るためにこの大衆廟を建てた．1917年（大正6年）日本人は廟の東北側に塩田を開発し，更に西南側の埋立地を造林保留地とした．当時その界隈に住んでいる漁民は32世帯に過ぎなかった．日本人の開発に不安を覚え，心の拠り所の廟建築に向けて漁民達はお金を集めた．そしてやっと1961年に旧廟を修理した．その後は経済成長により，1984年に旧廟を取り壊し，1987年1億元で現在の廟を完成させた．廟の左側は養殖池で，後ろは稀少植物「紅樹林」の保護区である．さらに廟庭の左にこの近くの海で亡くなった「抹香鯨」親子の骨標本陳列館がある．コートの隣にもう1軒小さい無縁仏の廟がある．後ろ庭には戦死したオランダ人の骨塚が残っているため，この廟も観光拠点の一つとして紹介されている．貴重な自然環境と歴史が学べる場所のため，近くにある小中学校から校外授業の時間に生徒を連れて見学に来ると廟の職員が言った．昼間，近くで働いている人たちはよくこの廟の涼亭に昼寝に来るそうである．また廟庭の右のすぐ側にバスケットボールのコートがあり，斜め先にある小学校の生徒は良く遊びに来る．管理委員会運営であり，村民は50世帯くらいであるが訪問客が多い．

創建の経緯は村廟である．墓地の廟であるため，子どもの溜まり場にはなりにくいが，市政府は観光拠点の1つに位置付けている．又高齢者の溜まり場や，近隣で働く人々の休憩場所になっている．

3. まとめと考察

集い機能に注目してまずどのような集いがあるのかをまとめると，地域全体での取り組み（企画集い）と，自由に地域住民が集う（溜まり場集い）場合の2種類にわけられた．そして，それ以外の独自な取り組みが多くの廟でなされていた．

農村部の廟での使われ方の特徴を，事例からまとめると以下のようになる．農村部の廟は大きくは4つのタイプに分けられる．1つは地域住民のための集い機能を中心とした廟（事例1，3，9，11）であり，実数としては，このタイプが一番多いと考えられる．少し対象住民が増えると，機能がプラスされていく傾向があり，そこで2つ目は住民への啓発と教育機能である（事例4, 5）．更に管理委員会や地域リーダーの影響で，経済活動を展開する廟もある．経済活動の方向は2つあり，1つは地域の中心地形成を行い地代などの収益を得る方向（事例8，10）と、もう1つは観光地化を目指す方向である．観光地化は古跡などですでにその資源をもっている廟（事例6）は宿泊所経営などでこの資源を最大限に活用する．そうでなければ，大規模な廟や施設を立てる（事例7，12，13），シャーマンの力の活用（事例2）などで進める．村民が集うための機能のうち，企画集いはどの廟でもほぼ実施されていたが，事例6のみは完全に観光機能に集中化していた．溜まり集いは集い機能中心の廟と，中心形成の廟では継続的に多数の住民の溜まり場集いが見られたが，啓発や教育活動，あるいは観光機能に傾斜した廟では，一定避けられる傾向が見られた．観光機能を重視した廟では，ホテルや旅館代わりに雇用提供の場になっており，そこでの集いがあると考えられるが地域の人が自由に参加できる状況はないと思われる．

廟の運営は，地域住民から選出された管理委員会で行い規模が大きくなると管理人や経理を雇っている．しかし土地の購入，廟の建築，企画集いの経費などは住民からの献金や集金で賄う，経済的にも運営的にも完全な自治組織といえる．そのため廟は，収益が上がる努力をしている．更に積極的に，住民に雇用先を提供するための観光地経営に乗り出している廟もある．これらから，農村部の廟は住民の集いの場所であるだけだなく，地域生活の中心地であったり更に雇用先であったりと，地域生活の要であるといえる．

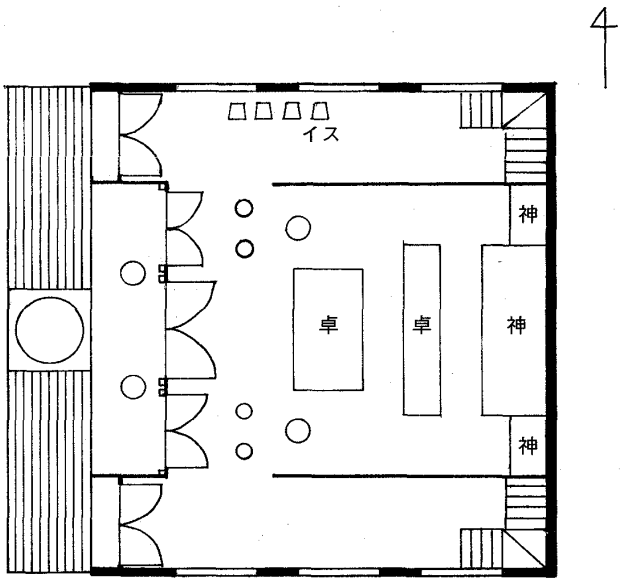

イス
神
卓
卓
神
神

図 2

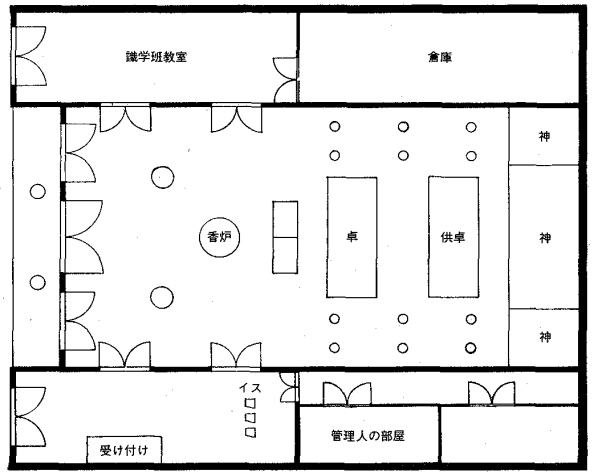

識学班教室
倉庫
神
香炉
卓
供卓
神
神
イス
受け付け
管理人の部屋

図 3

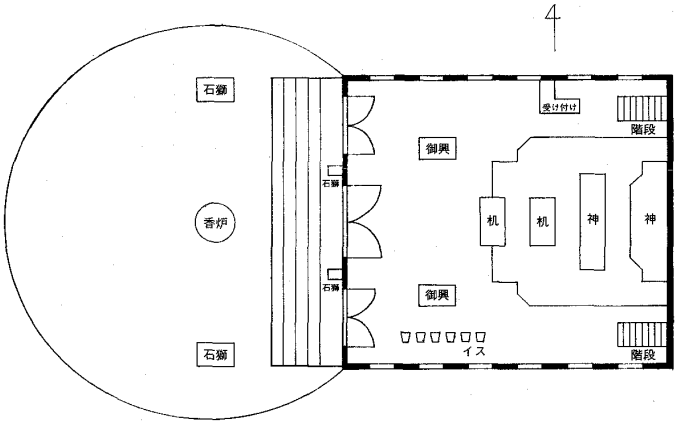

石獅
受け付け
階段
御興
石獅
香炉
机
机
神
神
石獅
御興
石獅
イス
階段

図 4

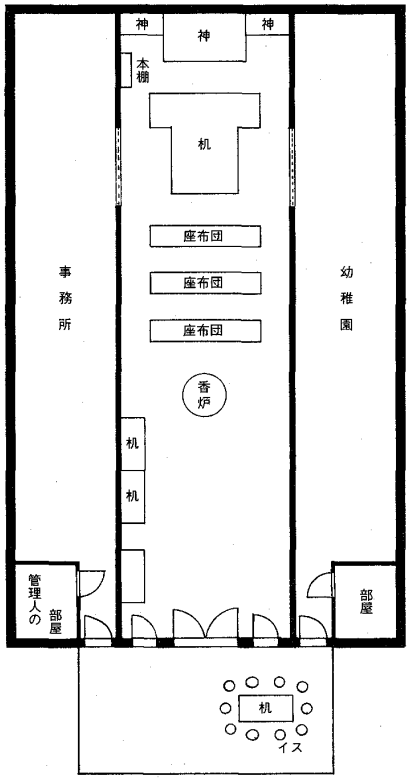
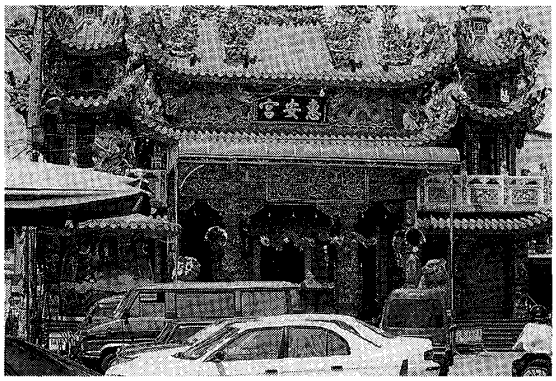
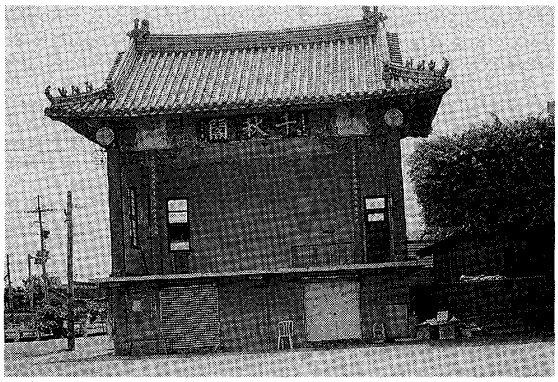

神
神
神
本棚
机
座布団
座布団
座布団
事務所
幼稚園
香炉
机
机
管理人の部屋
部屋
机
イス

図 5

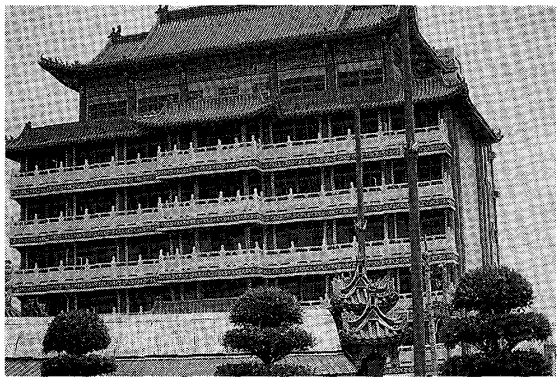


事例 3 「恵安宮」陳水扁総統の故郷にある廟

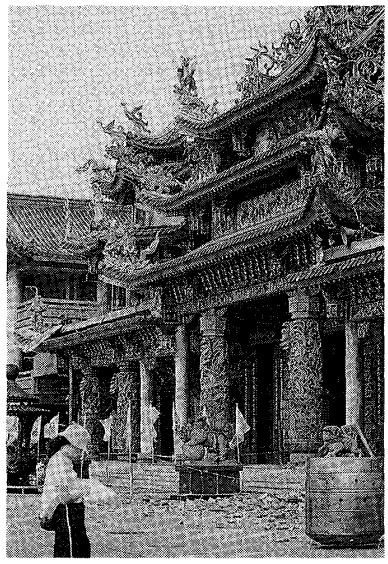
事例 3　恵安宮 2000 年 5 月に総統就任お祝いに来た観光客達



事例 4　東隆宮の前にある劇台



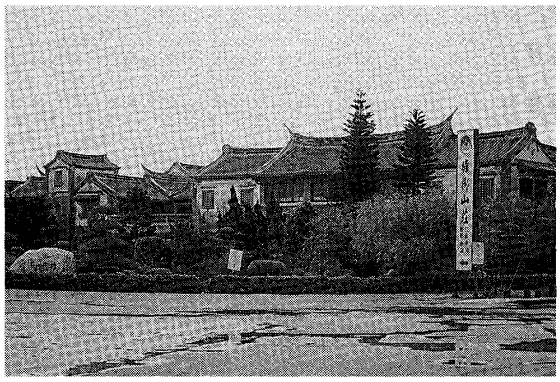
事例 4　東隆宮の隣にある附属文物博物館



事例 5　海埔池王府の真正面

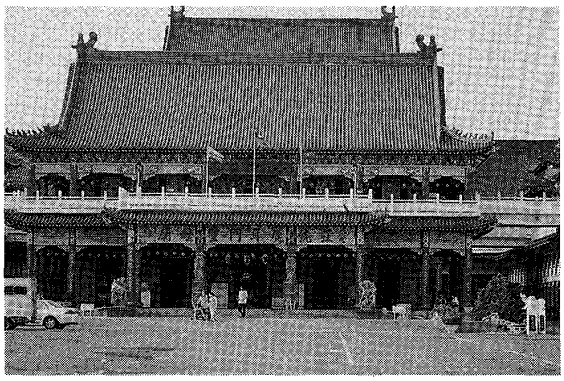
事例 5　海埔池王府の廟庭の一隅にある戦車

事例 6　南鯤鯓代天府の廟庭

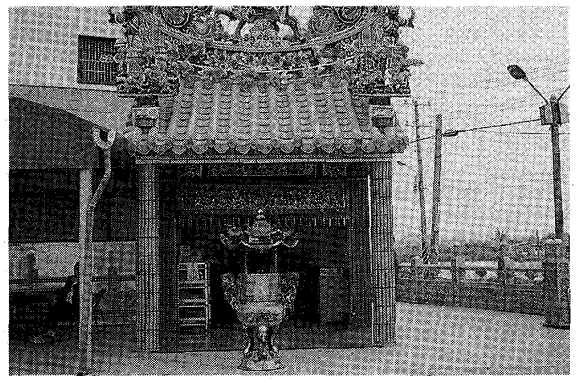


事例 6　南鯤鯓代天府の宿泊施設一四合院「康榔山荘」

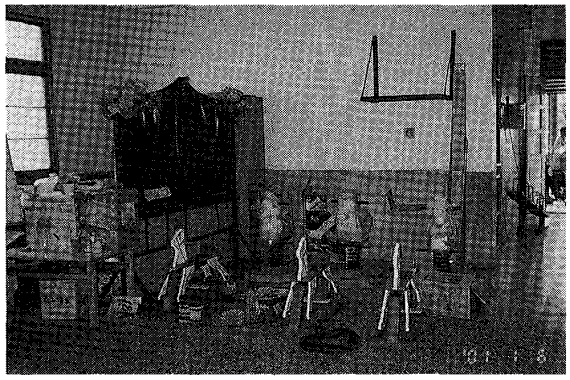
事例 7　鹿耳門聖母廟涼亭で時間を潰す老人達



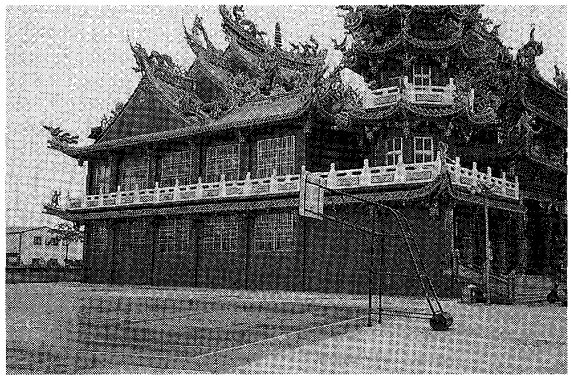
事例 7　鹿耳門聖母廟



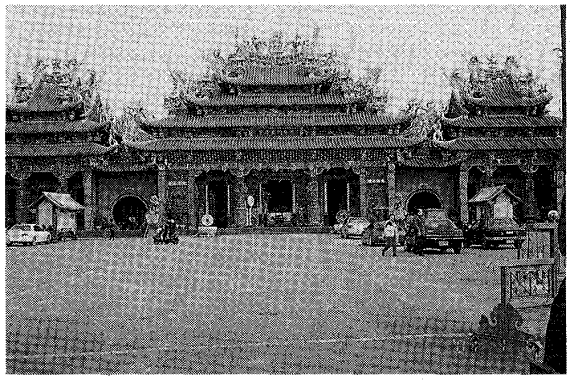
事例 9　台南仁徳郷―「福徳祠」。ミニサイズである。



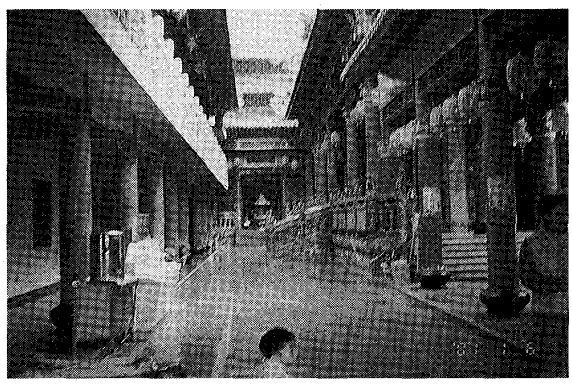
事例 10　七股郷「玉龍宮」廟の附属居室にある子供の遊び場



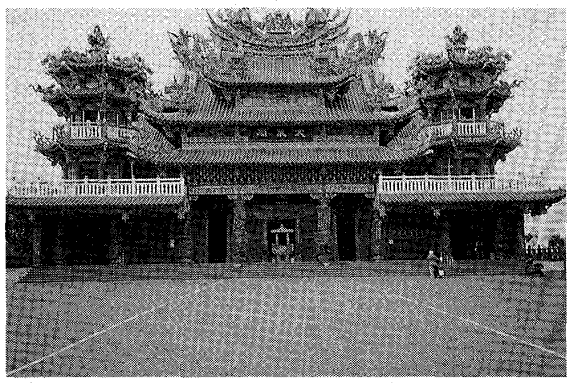
事例 11　吉安宮の側にあるバスケットボールコート



事例 12　鹿耳門天后宮



事例 12　鹿耳門天后宮の中にある廻廊



事例 13　安南区四草大衆廟

4. 謝　　辞

最後に，建設的で的確な助言をしてくださった自然科学研究科の両角先生や研究室の皆さん，調査の手伝いをしてくれた台湾私立南栄技術学院の学生たち，そして調査に応じていただいた管理委員の皆様に厚く御礼申しあげます．

注および参考文献

1) 李　威儀，鈴木　毅，高橋鷹志：台北龍山寺と周辺地域における居方．コミュニケーションの質の考察 ── 都市空間の中の居場所に関する研究　その 1 …日本建築学会計画系論文集第 468 号・pp133 ～ 141・1995
闕　銘崇，田中禎彦，布野修司：新店市広興里の集落組織の構成と寺廟の祭祀圏…日本建築学会計画系論文集第 521 号・pp175 ～ 181・1999
闕　銘崇，田中禎彦，布野修司：台北市の寺廟，神壇の建築類型とその分布に関する考察…日本建築学会計画系論文集第 526 号・pp185 ～ 192・1999
闕　銘崇，布野修司：寺廟，神壇の組織形態と都市コミュニティ：台北市東門地区を事例として…日本建築学会計画系論文集第 537 号・pp219 ～ 225・2000
2) 李　威儀，鈴木　毅，高橋鷹志：台北龍山寺と周辺地域における居方．コミュニケーションの質の考察 ── 都市空間の中の居場所に関する研究　その 1 …日本建築学会計画系論文集第 468 号・pp133 ～ 141・1995
3) 「廟建築」とは，神様を祭っている空間の正殿と廟の前にあり，壁なし屋根付きの休憩スペースと正殿の両側か近くにある付属居室の総称である．
「劇台」とは，廟の真正面にあり，祭りがある時伝統劇を行うステージである．
4) 炉主：儀式で神が志願者の信者から炉主を選ぶ．一年間神像の分身を自宅に迎える権利があり，次年度の祭りの主催者である．たくさんの寄付を出さなければならないが，商売繁盛などの良いことがあると信じられているので，志願者が多い．
5) 王爺廟：南台湾の宗教信仰の中で，「王爺」は一番人気がある．王爺信仰は元々疫病神の信仰であった．疫病が流行る時，中国福建省沿岸の住民たちは疫病神に祈願してから，綺麗な小船に神を乗せて，海に流す．この小船はほとんど台湾の西南海岸に漂流して来る．早期の移民たちは，過酷な環境で疫病にかかったら，神に祈るしかできなかったから，拾った小船を海に流さないで，廟を建てて祭ってきたのである．